

サザエさんたちの呼びかけ

阪神大震災・瓦版なまず集成 1998-2008



もう女性と子どもしか
信用できない。

傷を負って駆けまわる彼らの光は、
どこまで大地を
包みこむことができるか。

サザエさんたちの呼びかけ

阪神大震災・瓦版なまず集成 1998-2008



震災・まちのアーカイブ

サザエさんたちの呼びかけ——発刊の辞

季村敏夫

なまずとサザエの、ふしぎな出遭い。はじめに出遭いあり、大地の傷から生ずる光のごとし。光は黒暗淵^{やみわた}の面^{おもて}を覆ひたりき。

なまずは10年、私たちが出し続けた「瓦版なまず」。サザエは、長谷川町子さんの漫画に登場するフグ田サザエ。いまや「瓦版なまず」の主人公こそ、平成のサザエさんたちなのである。もう女性と子どもしか信用できない、こういった詩人がかつて居たが、傷を負って駆けまわる彼らの光は、どこまで大地を包みこむことができるか。アーカイブのドアを開ける母の手にひかれていた幼児も、もう中学生。いのちは、みどりのそよぎのなかで息づく。

長田区の小さな仮設の事務所。玄関は北向きなので、いつも高取山を仰ぎ見ることができる。山影がとる部屋に閉じこもり、日の暮れまで議論をしたあと、少し疲れた足取りで駅に向かう。歩いている私と一人の青年以外、すべて女性、ほとんどは主婦である。同じように駅に向かうが、足取りは違っている。そのように、一人ひとりの考えは違う。前史は災厄、黒暗淵をきり裂いたあの大地震がなければ出遭うことはなかったと、だれもが胸のなかで確かめながらの家路。小グループだが、この多元的な寄りあい面白い。小さいことへの自足を戒め、人と人が向きあう場から逃れまいとして今日までたどってきた。

今回は私が発刊の辞という大それた役を担うことになったが、絶えざる発刊、途上に在り、沈黙を見据えながら、今後も自らに発語を促しつつづける活動になることは間違いないであろう。

さてまとめられる合本は、ときどきに「書かれた」物の集成である。「書かれた」物とは何か。「書かれた」事との違いは何であるのか。そもそも書くとは、いかなる行為なのか。物、事、それに心。私は、「書かれた」物と事、「書かれなかった」物と事、それらと心の絡みあいにおもいを巡らせている。

〈書かれなかった事は、無かった事じゃ〉。これは、短編小説「文字禍^{もじか}」（昭和17年）で発せられた中島敦の声である。ならば、記述からもれてしまった事は歴史と見なされないのか。そうあってはならないという憤怒を抱え、あの日私は転がって居た。

そのように13年後、放擲された偶然性をとらえかえしている。

瓦版という、メールやブログ全盛の時代に、いかにも反時代的なネーミングの媒体を出そうとおもいつき、小さなことづてながら何とか出し続けてきたのは、「書かれた」事と物、「書かれなかった」事と物の狭間に在り、そこで身体を曝し続けよ、あの日の死者が命じたからだとおもえてならない。

「書かれた」物が失われる事がある。散逸そして隠蔽である。だからこそ保存の重要性が見直され、その活動に力をそそぐことになる。私たちのグループも、資料の保存活動の一角を担ってきたが、「書かれた」物は、「書かれなかった」事の一部に過ぎないと絶えず遅れて気づかされてきた。

〈書かれなかった事は、無かった事じゃ〉、博士がこうつぶやいたそのとき、大地震勃発。壁が崩れ書架が倒れ、頭上から粘土板が文字霊の凄まじい呪い声とともに落下、博士は無慙にも圧死。これが中島敦のストーリーだが、事後の私は、自然がもたらすことになった報復にうちふるえるばかりであった。

「書かれた」物だけが歴史ならば、「書かれなかった」声は存在しなかったこと、即ち、沈黙はそのまま抹殺につながる。ならば、あの日の一瞬の死者、何が何だかわからないままに消えた死者は永劫浮かばれないのではないか。それだけはゆるしてはならぬと、あの日もいまも私はおもっている。

歴史は物と事と心の絡み合いで織り成される。いや、逆だろう。物と事と心の絡み合いが歴史の端緒を形成する。だから、「書かれた」物と事を自明の前提にするのではなく、絶えず疑い、「書かれた」事と「書かれなかった」事との狭間に転がり続けねばならないのではないか。転がるとは、現在という時間に曝され、流動することであり、今ここに流れこむ過去を読みこむことである。事物の来歴を読み解くことは、収集分類作業に内在するたいせつな要素である。

いやそもそも、「起こったこと」は「起こらなかったこと」、「在ること」は「抹殺されたこと」との吊り合いの磁場でおもうべきなのだ。さらに、「成ること」「無いこと」「ありえたこと」「ありえなかったこと」などの場所に跨って、越境的におもいを深めていかねばならない。私たちのグループが資料公開の前段階としての収集、分類、整理作業に力をそそぎこんで来た意味は、まさにここにある。ロゴスの動詞レゲインには、収集する、寄せ集めるという意味があるという。そうすると、

収集には収集のエチカがあり、分類整理にも深い思想があることになる。

また、収集は潜在的な物の記憶を喚起させる行為だとする考えも学んだが、待ち受けるだけではなく、散在する物を寄せ集め、目覚めさせるという収集分類作業には、実在との現実的な関係、流動的な応答にのめりこもうとする静かな熱が秘められている。物と人との出遭い、偶然性への問いである。現われ出た震災一次資料。たとえば、うどんの汁や飛び散ったコーヒーがこびりつく活動日誌には、時間が引き搔き傷のように刻まれている。日誌のどの頁も時間の断面であり、一枚一枚をめくっていくと、行為の瞬間が躍動的に迫ってくる。過去が現在に浸透、過去を呼びこむ現在へ、絡み合うように未来がおしよせ、三つの時間が巴になって沸騰する様子を、私たちはどの頁からも透視することが出来る。余白の部分に、「ギョウザ」と乱暴に書かれた一行の背後には、災厄に震撼とする息づかいが潜み、冷えた弁当や菓子パンで救援活動をし、「ああギョウザが喰いたい」とおもわず胸のなかで叫んだ青年を囲む人びとの視線、背後の沈黙を感じとれるのではないだろうか。

だが背後の声は隠れている。潜在する声の、ほんの一部だけが断片として横たわる。それらは、なぜ目の前に現われ出たのか。ある日あるときの行為の痕跡として、なぜ私たちの前に投げだされて在るのか。「書かれた」物、現前する物事に驚きをもって接すること。ふしぎだと感じ入ること。五感を総動員させ、断片をたどることによって背後の沈黙をたぐり寄せること。近づくこと。ビラやチラシ、活動日誌、人と人との関わることによって刻まれた物。それらを時間の経過とともに移動させる人。私たちの手元へ現れ出た資料と対話しながら、黙々と整理分類する時間。その過程で、隠れていた物と事が一つひとつ明らかになる。資料の現実性と潜在性、人と物とが重層的に絡まる出遭いは、まさに驚きであり劇的だった。

これまで送り出された24冊の瓦版には偶然の劇がある。偶然性、その最たるものは大地震だったが、勃発は悲劇だったか。この問いにおもわず頭を垂れ、胸のなかの沈黙をこじあげようと試みて初めて、ひょっとするとこの事態を無意識裡に待ち望んでいたのかもしれない、暗闇の彼方からのこんなつぶやきを聞きとり、ぞっとしたりする。

私たちの土地で何があったのか。その後、どのような問題が起こり、どう対応したのか。その過程で、何を獲得し、何を喪失したのか。瓦版をたどれば、その一端

は明らかになるとおもうが、声は、出遭いから現在まで小さいままである。いつ、いかなる場合にも背伸びせず、手元にあるものだけでやりくりをしてきたこと。しっかりと議論を重ね、互いの違いを明らかにさせながら一致点を希求したこと。平成のサザエさんたちが中心になって呼びかけを繰り返したこと。ささやかな歩みでも、絶えざる一步はいつか崇高さを生み出す。これらが、小さいことの特徴であるが、この在りようは決して小さくないとおもっている。

合本集成のどこにも名前は出て来ないが、下町長田区の一角で作業をしたあと、うつむいて茶を啜っていた人。スクラップ工場の退け時、窓からの夕暮れのサイレンを浴びた佇まい。父母でもなく、妻でも兄弟でも、子でも親戚でもない人びとこそ、忘れてはならない面影である。

少し傾いた風景

栗原 彬

胴体が部厚い旧型のテレビが6台だったか、7台だったか。画面を外に向けて円をつくるように並べられていた。全ての画面が阪神大震災の起った1月17日の光景を思い思いに流していた。テレビ局によって異なるとは言え、多くの遠景で、生々しく黒煙が上り、火の色も見える神戸の被災の光景を伝えていた。凝視しないわけにいかない。あの日、テレビに見入ったまま、体がかたまって動かなかった私が見えるから。「テレビをまたいで入って、円の真中に立って下さい」。言われた通りにすると、当然のことながら、つき出したテレビのどす黒い背中しか見えない。当惑して案内の人に「解」を求める顔を向けると「それがあの日神戸の市民が見た光景でした」。被災者は誰も、テレビが流しているようには、燃える神戸の風景を見なかった。頭から血が引いていくのが分った。阪神大震災の記憶と言えば、傾いた高速道路、倒壊したビル、焼け跡の瓦礫の山といった定番の風景。テレビの裏の細部を見ていた人々の記憶は、私をかすめもしなかったことになる。何も見ていなかったのは私ではなかったか。目に見えるものを見ることで、目を塞いできたものの大きさに気付かされて、テレビの円列の中に立ち尽くすしかない。

人々が不在において見ているもの。毎朝あいさつする人が、あの日から消えてしまった。あいさつの不在において日々刻まれていく根元的な記憶。不在の人に想像を働かせる、というのではない。あいさつの不在が身振りににおいて突如身体を襲って私を震撼させるのだ。

「震災・まちのアーカイブ」が震災10年に開いた展示会は、見えないものを見るための仕掛け、見えないものを身振りに起すやわらかな表層に充ちていた。たとえば、詩の多声体的な朗読の試み。一つの詩が複数の声の重なりとして聞こえている。その上に私の声を重ねることもできる。複数の声は最初からずれているのだから、「正しく」重ねようとすることに意味はない。声ではなく、間がずれるのだ。詩の意味を切断する間のずれに、新しい意味または無意味が宿ろうとしている。

10年前を想起する人々の映像と語りの中で、10歳の男の子が、お母さんのおなかの中で台所の食器棚が倒れてガラスや食器の壊れる音を聞いたという。私もその

音を確かに聞いたもののようにして記憶に起すのである。

「瓦版 なまず」も細部の記憶を身振りに変換する仕掛け、言表の表層づくりへの意思が働いている。「なまず」の何号だったか、地震によって少し傾いた家屋は目まいを起すという語りに出会った。大きく傾いた家屋の写真は、それなりの驚きをもたらすものの、映像にとどまって身振りに届かない。ほんのわずかな傾き。一度は見過しながら、ひっかかるものがあるってその写真に引き返してくる。注視していると目まいがやってくる。軽い吐き気も。どこかで経験した身振りだ。そう、荒川修作が造った養老天命反転地を歩き、よじ登ったときの経験だ。起伏に富む広大な空間のここかしこに家屋のようなものが点在する。少し傾いた床、かなり傾いた柱、ビー玉を置けば転がり落ちる机、何度腰かけ直してもすべり落ちないではない椅子などの仕掛けがある。この空間をたっぷり遊んで外に出て、直線と直角で構成された、近代的な邸宅の整然と並ぶ屋敷町を歩き始めると、目まいを覚え、脚がもつれた。

「なまず」の誰もが、ほんのわずかな傾きの風景を抱えている。それは文体の上では、ためらい、口ごもり、沈黙に連動している。表層のためらいが、私の中の眠っている小さな傾きを呼び起す。誰もが他者を代弁することなく、自分の生の実験を語っている。といっても、一人称の語りという意味ではない。誰もが、記憶を掘り起し、記録を収集する過程で、個人を横断するさまざまな多様体に分を開いた経験をもつ。人は、姓名、手、皮膚、犬、街、被災者としての王子動物園の象などの集合体である。誰もがすでに複数だから、「なまず」はずい分と大勢の生き物がいる多声的な集団となる。

「なまず」の人々は、記憶が身振りとなって芽ぶく時のさなかに生の痕跡を捉えようとする。細部が係留し、身振りが立ち上がる言表の皮膚＝表層を紡ぐ作業が進行する。「なまず」の表層が身体に起ったこと、細部の集積である限り、その表層は何かを代弁する言葉を含まない。「未来のための記録」「次世代への贈り物」「防災への教訓」「記憶の風化に抗して」といった言葉は、「なまず」には決して見出せない。表層の技法としての表現方法もまた、「代弁」ではないから、「啓蒙」でなく、「説明」でなく、「解釈」でもない。否定形を並べたてたけれども、その先に何があるか。不可視の過去を現在形で浮かび上らせる身振りだけがある。表層に書き込ま

れた「解釈するな。ためらいつつ語り、繰り返し実験せよ」という銘文から、記憶の身振りは立ち上る。

その地に育った場合にはもとより、その地に住み暮らしたことがある記録者は、多声体としての自らの過去へと、すなわちその地が語りかけてきた多様な声の集積へと、旅をする。記録者は「過ぎ去り行く者」(トマス福音書)「傍観者」「遊歩者」。生者と死者のほとりに無限の関心をもって、距離を置いて立つことによって、祈りと記憶の表層という記録を紡いでいく。

13回目の1月17日を迎えようとしていた神戸で、その前日に、かつてこの地の仮設住宅に住むある被災者のほとりに立った若い友人に導かれて、西神を訪れた。仮設住宅は跡形もなかった。広大な跡地は、防災用に幅広に造られた直線状に延びる舗装道路で整然と区割りされ、道路に沿って同じ手狭な敷地面積に、似通った住宅が立ち並んでいた。いずれの家も、小ぢんまりした駐車スペースがあり、小さな庭を持ち、細くて丈の低い枝葉の乏しい植物が等間隔に垣根がわりに植えられている。どの家も造りつけの建材で組み立てられている。同じ区画内で屋根や壁の色が統一されており、壁面に部分的に木材の飾りを一様に張りつけるといった似姿がありながら、たとえばテラスの造りが少し異なるというように、みんな同じでありながら、少し同じでない顔、顔、顔が並んでいる。

全く人の気配がなかった。青く晴れわたった空の下に、物音一つせず、人の匂いを感じさせない住宅群がただ広がっている。車止めにクルマがあるので、人が住んでいることは確かなのに。この街には店というものが無い。コンビニもない。辛うじて一人の生き物、犬に出会った。庭に伏せている犬に呼びかけると、走り寄ってきて、垣根越しに私たちの手をなめたり、興奮して後脚で立ったりした。遊んでもらえてうれしい。しかし決して吠えないようにしつけられている。

沈黙する西神を歩きながら、この地が水俣の埋め立て地に重なって見えてきた。チッソ水俣工場が有機水銀を含む工場排水をたれ流した排水溝のある百間港は、水俣病の原点と言える。その海に鋼板を打ち込んで、その内側にバキュームで吸い上げた水俣湾のヘドロと、魚をミンチにしてつめこんだドラム缶を埋め立てて、表土を盛り、芝で覆った。埋立地は、美しい公園さながらに廃墟だ。きれいに整った西

神もまた廃墟である。権力が受難の記憶を消し去ろうとするほどに、いのちの痕跡は、廃墟に深く深く刻まれる。聞く耳さえあれば、いのちの声は、整った廃墟の表土や舗装をつき破って起き上る。しかし権力は外からやってくるだけではない。水俣展を組み立て、記録を創る行為そのものがはらんでしまう権力性もある。聞こえる大きな声を増幅して再話し、聞こえない声を封殺する。しのびこむこの権力性と向き合って、私はどのように聞く耳を取り戻すことができるか。問いを手放すことなく、聞こえないいのちの声、地の響き、海のささやきに耳を澄ましていきたい。ほんとうに。

季村敏夫さんがいくつかの文章で引用している、緒方正人さんが海辺で私に語った言葉。「潮の力とか海の力という圧倒的な力の前には、人間のつくったものなんてわずかな時間しか原型を保ちきらんという気がします。いずれ壊れる。おれはそこに、どこかで心地よさみtainなものを感じますよ」(栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉(編)『越境する知2・語り、つむぎだす』東京大学出版会)。この言葉は、ナチスの強制収容所で音楽隊員であることで生き延びた二人の老女の言葉につながる。「麦畑と青い空さえあれば、私たちは生きていける」(映像作品『死の国の旋律』)。

(立教大学名誉教授、日本ボランティア学会代表、水俣フォーラム代表)

あの角をまがった先にある小さな場所

大門正克

神戸に出かけるたびに、JR鷹取駅を降りて地下鉄長田駅まで歩くようになった。阪神大震災後のことだ。鷹取教会に寄り、JR新長田駅を抜け、ガードを越えて歩く道である。そのうちのいくつかの角にさしかかるたびに、私は立ち止まって息を整え、それから角をまがる一步をふみだす。以前に見た風景と、そこで見る新たな風景を重ね合わせ、変化を感じとろうとする。風や音を感じながら、しばらくそこに立ち尽くす。

いくつかの角をまがった先に「震災・まちのアーカイブ」の事務所がある。神戸には休日に出かけることが多かったので、事務所はたいてい閉まっていた。それがわかっていても事務所の前まで足を運ぶ。休日の事務所とその近辺は森閑としている。しばらくその情景に身をおき、それから地下鉄長田駅に向かう。

鷹取駅を降りてある角をまがったときに、ふいに小学校1年生までくらしていた千葉県船橋市を訪ねたときのことを思い出した。訪ねたのはたしか大学生のころだったから、今から30年ほど前のことだ。以前に住んでいた家の近辺に来たとき、ある角でいったん立ち止まり、やはり呼吸を整えてからまがった。角をまがった先の道はよく遊んだ場所なので、どう変わっているか気になったからだ。その道は昔と同じように見えたが、もっと広く長いはずだと思っていたのに意外に狭く短かった。私はしばらくまぶしいものを見るようにその道を見ていた。

その道から入り込むいくつかの路地は、缶けりやかくれんぼの恰好の隠れ場所だった。一つひとつの路地に、息をのんで隠れ、しゃがんで身をひそめ、駆け抜けた記憶が貼りついている。

自宅は路地の一番奥にあった。路地では向かい合わせに4軒ずつ、全部で8つの貸家が軒を連ねていた。母に怒られるたびに向かいの家に逃げ込んだ。向かいには、秋田県出身のご夫婦に娘さんがいて、たいそう可愛がってくれた。ご主人は駅の近くにある細い路地の奥で、雛人形や5月の節句の人形を扱う小さな店を開いていた。向かいの家と自分の家の距離は1メートル半くらい。怒られて逃げ込むときはたい

てい裸足のままだった。それがまた母に怒られる材料になった。

私が船橋市でくらししたのは1950年代のこと、船橋市を再訪したのは1970年代のことだ。再訪して角をまがったとき、道が意外に狭く短く感じたのは、小さいころの体験による記憶と大学生の実感のあいだに落差があったからだろう。

それに加えて今から思えば、その道のあたりには高度経済成長の波がまだ押し寄せてなく、小さいころのままのように見えたことも、落差を感じた一因だったように思う。小学校1年生のときに、私たち家族は東京の池袋に引越し、以後、長く池袋でくらし。池袋は、東京オリンピック前後にものの見事に変貌した。池袋でも我が家は路地の奥にあった。その路地を出た道はオリンピックを前にして舗装された。1964年夏、道路を舗装したコールタールの焼けつく匂いをよく覚えている。池袋の変貌とくらべれば、船橋市でくらしていた近辺は、ほとんど変わっていないように見えた。

大学生として船橋市を訪ねたとき、小さいころの記憶を呼び覚まそうとした。路地の角をまがるときに、あるいは広い道に出る角を曲がるときに、小さいころの私はどんなことを感じていたのだろう。ごく普通のこととして角を曲がっていたのだろうか。それとも何がときどきすることがあったのだろうか。

「震災・まちのアーカイブ」は、私にとって、あの角をまがった先にある小さな場所だ。

事務所は、いくつかの角をまがった先にある。あの角をまがる。風景はいつもと変わらないように見えることもある。数年前と、いや20年前と変わらぬ風景に見えることもある。だが、そこにはやはり何がしかの変化があるのだろう。変わったのは風景だけではない。風景を見る私が変わった場合もある。あの角をまがった先にある「震災・まちのアーカイブ」に足を運びながら、何がどう変わったのか、何が変わっていないのか、そのことを確かめながら歩みを刻む。目をこらし、立ち止まり、息を整える。その先に、「震災・まちのアーカイブ」はある。

「震災・まちのアーカイブ」と「瓦版なまず」は、私にとって大事な小さな場所である。市村弘正『小さなものの諸形態』(筑摩書房、1994年)になぞらえていえば、「物事が全体へと馴致され回収される」危険性の多い現代では、「小さなもの」が大

事だと考えてきた。グローバル化と新自由主義が横行し、阪神大震災が記憶の一片にまとめられてしまう全体に抗するために、私は求めて小さな場所を書いてきた。ときに小さな場所をつくることもあった。「瓦版なまず」に文章を書かせていただいたのも、小さな場所ゆえであった。「瓦版なまず」が小さな灯りをともし続けることを願っている。

(横浜国立大学経済学部教員)

サザエさんたちの呼びかけ——発刊の辞	季村敏夫	003
少し傾いた風景	栗原彬	007
あの角をまがった先にある小さな場所	大門正克	011

被災地の記憶と記録を考える 震災・まちのアーカイブ設立にあたって		024
----------------------------------	--	-----

第1号 1998年7月2日

「長楽第2避難所資料」についての報告	季村範江	027
震災一次資料整理の現況	佐々木和子	029
【コラム】季村敏夫		029
一枚の絵から聞こえてきた声——沖縄の旅から	藤原直子	030
【民間アーカイブの系譜①】「民間」から……	寺田匡宏	031
編集後記	寺田匡宏	032

第2号 1998年9月26日

「検証・公費解体——つぶやきの震災精神史」について	寺田匡宏	033
ゼンカイの家	季村範江	035
メモ（1998.8.28）	木内寛子	037
【コラム】被災地・視聴草その二	季村敏夫	037
断層の断片——野島断層を訪ねて	藤原直子	038
歴史事実を問い直す意味	青山真由美	040
【民間アーカイブの系譜②】「文庫」の精神〈1〉	寺田匡宏	042
活動日誌（1998年2月～9月）		043
編集後記	寺田匡宏	044

第3号 1998年12月3日

骸骨・なまず・ビラ——『阪神大震災 さまざまな声の葉』発刊によせて

寺田匡宏	045
つぶやき——公費解体編 ささきかずこ	047
私たち、私自身へのメモ (1998.11.22) 木内寛子	048
東尻池便り 寺田匡宏	049
〔民間アーカイブの系譜③〕 ネット上の記憶? 寺田匡宏	050
活動日誌 (1998年9月～11月)	051
〔コラム〕被災地・視聴草その三 季村範江	051
編集後記 寺田匡宏	052

第4号 1999年3月27日

絆を保存する——「鷹取中学避難所資料」現地調査を始めるにあたって

市村登和	053
資料の“ぬくもり”とは何か——「震災・まちのアーカイブ」この一年を振り返って	
寺田匡宏	055
家のこと (1999.2.11) 木内寛子	056
一冊の帳面と一枚の紙片から 藤原直子	057
再び、記憶、記録に関して 季村敏夫	059
家という夢が壊れたあと——島本慈子『倒壊』を読んで 季村範江	060
〔民間アーカイブの系譜④〕「コルシア書店」 寺田匡宏	061
活動日誌 (1998年12月～1999年3月)	062
編集後記 寺田匡宏	062

第5号 1999年7月18日

内省と祈り——震災・まちのアーカイブ、「阪神大震災・記憶のための場所」(仮)

に向けて 寺田匡宏	063
集まって人が住むということ①——ある被災マンションの再建 佐々木和子	065
ヒマラヤからの贈り物 季村範江	066

『1941年。パリの尋ね人』からのメモ	木内寛子	067
残し、表現する志——東京研修のメモから	寺田匡宏	068
震災のコメモレイション	寺田匡宏	070
〔ブックガイド〕まちを歩く人の本	寺田匡宏	072
活動日誌（1999年3月～7月）		073
編集後記	寺田匡宏	074

第6号 1999年11月1日

東京から、次の対話のために	山本唯人	075
資料の公共性について	季村範江	077
震災・まちのアーカイブ、資料公開にむけて	木内寛子・藤原直子・寺田匡宏	078
〔民間アーカイブの系譜⑤〕史料の運命	寺田匡宏	079
夏に思ったこと	季村敏夫	081
活動日誌（1999年7月～10月）		082
編集後記	寺田匡宏	082

第7号 1999年12月25日

心を寄せるということ——『百合 亡き人の居場所、希望のありか』を読んで		
市村登和		083
集まって人が住むということ②——被災マンションと法律①	佐々木和子	085
「震災・まちのアーカイブ」所蔵資料閲覧のご案内		086
かわら版となまず絵が照らしだす現在——東大総合研究博物館「ニュースの誕生」を見て		
寺田匡宏		088
活動日誌（1999年11月～12月）		089

第8号 2000年8月13日 特集・メモリアルセンターと公論

今、なぜメモリアルセンターと公論か	寺田匡宏	091
声・メモリアルセンターに望むこと	稲葉洋子・辻川敦・室崎益輝・島田誠	093
「記録」と「記憶」の前提条件	笠原一人	095

横浜震災記念館——1924年	阿部安成	096
亡くなった者、壊れたものへの責任	季村敏夫	097
何を感じ、何を学び、何を伝えるのか	市村登和	098
阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）に望むこと	木内寛子	098
集めること、集め続けることを伝えること	季村範江	098
阪神・淡路大震災メモリアルセンター展示計画に関する公開提言		
震災・まちのアーカイブ		099
編集後記	寺田匡宏	102

号外 2000年9月30日

震災メモリアルセンターについて	103
-----------------	-----

第9号 2001年2月11日 「6年目の1月17日」

記憶は、いつも。——メモリアルウォークに参加して	上念省三	105
6年目からの課題	佐々木和子	106
記者として	西栄一	107
メモリアルセンターをめぐる2つのシンポジウム	寺田匡宏	108
資料収集とメモリアルセンター	季村範江	110
グローバリゼーションとメモリアルセンター	寺田匡宏	111
震災の〈質感〉——辺見庸さんとの公開対談のこと	菅祥明	112
『神の子どもはみな踊る』からのメモ	木内寛子	113
『すきなんや、この町が』	伊藤亜都子	114
ミニコミ資料の整理状況について	藤原直子	114
活動日誌（2000年8月～2001年2月）		116
編集後記	寺田匡宏	116

第10号 2001年9月6日 特集・記憶の居場所、記録のかたち

震災メモリアル施設は分散化されなければならない	笠原一人	117
「記憶のまち」のフィールドノート	蘇理剛志	119

小さな声の記録——牧秀一著『被災地・神戸に生きる人びと』を読んで	季村範江	121
対話は記録されるのか。	市村登和	122
他所からの視線・此処での視線	とみさわかよの	123
神戸から佐倉へ、そして都留へ	大門正克	124
2001年夏、ヒロシマから	辰巳大輔	125
「4つめの気持ち」を支えに——「震災犠牲者聞き取り調査」に参加して		
森本米紀		126
メモリアルセンター間近の出来事——元祿から平成の人情	季村敏夫	127
編集後記	菅祥明	128

第11号 2001年12月26日

語りえぬことを巡って その二	季村敏夫	129
活動日誌（2001年2月～12月）		132
米田定蔵・米田英男著『都市の記憶 神戸・あの震災』	蘇理剛志	133
発信！ 震災・まちのアーカイブ——ホームページ開設によせて	辰巳大輔	135
〔12月12日の神戸〕「残響の日々」から	菅祥明	136
編集後記	菅祥明	137
〔備忘録〕完成間近の「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」		138

第12号 2002年5月6日 記憶の分有をめぐる

記憶の聖なる次元	細見和之	139
震災とホロコースト——空襲前の神戸	季村敏夫	142
ある集いに参加して	季村範江	149
訃報	季村範江	150
編集後記	菅祥明	150

第13号 2002年7月27日 臨時特集「人と防災未来センター」

特集にあたって	菅祥明	152
痕跡論	笠原一人	153

癒しの森 藤原直子	155
バーコードに閉じ込められた言葉 大門正克	156
「模索」の対極にあるもの ハツ塚一郎	157
試案① 資料との接点を増やす 菅祥明	157
メモリアルと防災 季村範江	158
試案② 既存のリソースを活用する 菅祥明	158
もうひとつの展示——「1.17SHOP」にみるセンター問題 森本米紀	159
透過する記憶 菅祥明	160
試案③ 「展示評価委員会」の設置 菅祥明	162
編集後記 菅祥明	162

第14号 2003年1月16日 「震災論」のゆくえ

編集部から——アンケート回答 藤原直子・季村敏夫・季村範江・木内寛子	
笠原一人・蘇理剛志・佐々木和子	164
「5周年プロジェクト」の展開について 菅祥明	171
トヨタ財団助成共同研究「記憶・歴史・表現」フォーラムの発足について	
寺田匡宏	172
震災資料の現状と展望 菅祥明	174

第15号 2003年6月5日

痕跡論2 笠原一人	176
2002年度活動日誌①	178
〔往復書簡〕出会うということ——声、傷、場、音、痕 季村敏夫	179
2002年度活動日誌②	181
〔往復書簡〕季村敏夫さんへの手紙——「記憶の分有」をめぐるふたたび	
細見和之	182
2002年度活動日誌③	186
共に生きること 菅祥明	189
2002年度活動日誌④	190

詩人の地球の歩き方——佐々木幹郎著『やわらかく、壊れる』について

寺田匡宏——193

編集後記 菅祥明——194

号外 2003年10月25日——195

第16号 2004年3月27日

巻頭言 菅祥明——198

痕跡論3 笠原一人——199

2つの展示空間——「ひと未来館」と「いのちを考える——太田三郎と中学生たち」

森本米紀——202

空間と時間のよみがえる場所——「ドキュメント災害史——1703-2003」

大門正克——204

報告：ベルリン／ポーランド——記憶の多層域 笠原一人——206

運命の記録者——10年目の「ショアー」／チェルニアコフ日記を読む

寺田匡宏——208

8年半後の神戸へ——「知らなくてごめんなさい」の気持ちと 橋本京子——211

2003年度活動日誌抄——212

告知 新刊情報『アーカイブ前史』

菅祥明・藤原直子・季村範江・ハツ塚一郎・市村登和——214

編集後記 菅祥明——216

第17号 2004年11月20日

阪神大震災・記憶の〈分有〉のためのミュージアム構想 | 展 季村敏夫——217

展示に寄せて 季村範江——218

展示に至るまで——資料の熱 藤原直子——219

展示に向かって——Kさんへ 市村登和——220

だれのためでもない——「someday, for somebody いつかの、だれかに」展によせて

寺田匡宏——221

ああ楽しかった	市村光治良	222
「控え帳」より	季村敏夫	222
編集後記	季村敏夫	224

第2期・創刊号（通巻18号）2006年4月16日

今となってわかり始めたこと——木内寛子さんを送る	藤原直子	225
他者への呼びかけ——資料保存活動の現場から	季村敏夫	226
島の記憶と記録、そして旅人宮本常一のまなざし	柳原一徳	227
『器物』について、いま考えること	瀧克則	229
表現としての記憶	笠原一人	230
活動日誌（2005年1月～2006年3月）	季村範江	231
あとがき	季村敏夫	232

第2期・第2号（通巻19号）2006年7月18日

何をいかに「待つ」べきか	徳永恂	233
亡命ユダヤ人と遊んだ少女——山形裕子歌集『ぼっかぶり』から	季村敏夫	235
兵庫の津 古い言葉	和田英子	237
見んさい。蜜柑が喜うちょる——梶田富五郎の記憶と島の畑と	柳原一徳	239
光・灯台・エロス——林哲夫に	間村俊一	240
歌、痕跡として——映画『エドワード・サイード OUT OF PLACE』に		
季村敏夫		241
本屋の目 番外編	平野義昌	242
無形の歴史——川田順造『母の声、川の匂い』（筑摩書房、2006年）からの（再）出発		
山本唯人		242
活動日誌（2006年4月～6月）		244
あとがき	季村敏夫	244

第2期・第3号（通巻20号）2006年10月7日

いのちの記憶	安水稔和	245
--------	------	-----

「天文台殺人事件」の頃など	杉山平一	246
それは水夫の読み捨て雑誌から生まれた	宮崎修二郎	248
つわものどもが夢のあと	渡辺一考	249
久保田さんの笑顔	林哲夫	250
三把刀の記憶	林宏仁	252
街の律動を捉えて 編集グループ〈SURE〉のこと	扉野良人	253
夏のノートから——宮本佳明著『「ゼンカイ」ハウスがうまれたとき』（王国社）		
に触れながら	季村敏夫	254
われうたう 故にわれあり	港大尋	255
活動日誌（2006年7月～9月）		256
あとがき	季村敏夫	256

第2期・第4号（通巻21号）2007年1月20日

つわものどもが夢のあと—2	渡辺一考	257
海の民の記憶 連載3	柳原一徳	258
端がゆらぐ	季村敏夫	259
「発酵」と「発酵したもの」——「種」から何かが	水本有香	260
古書とアーカイブをめぐる——林哲夫著『神戸の古本力』のこと	市村登和	261
「まちのアーカイブ」ということ	佐々木和子	263
活動日誌（2006年9月～2007年1月）		264
あとがき	季村敏夫	264

第2期・第5号（通巻22号）2007年6月17日

うしろめたさをめぐる言葉の憂鬱	上念省三	266
思惟の迂遠	季村敏夫	268
まちのそとへ——アーカイブカフェを終えて	菅祥明	268
静かな眼	加納成治	269
安水稔和氏に聴く——雑誌の記憶	インタビュアー：季村敏夫	270
エディション・カイエと阪本周三 連載1	大西隆志	274

植民地の記憶 連載1 柳原一徳	275
登尾明彦詩集『パンの木』(みずのわ出版)を読んで 野口豊子	277
活動日誌(2007年2月～5月)	278
あとがき 季村敏夫	278

第2期・第6号(通巻23号) 2008年1月2日

〈記録〉以前 山本唯人	280
移民が移民を呼ぶ——植民地の記憶 その2 柳原一徳	282
太田省吾さんのこと 季村敏夫	284
古本ノ読ミ方 内堀弘	286
深い深い深い息づかい 安水稔和(聞き手=季村敏夫)	287
あとがき 季村敏夫	296

第2期・第7号(通巻24号) 2008年3月1日 特集・震災一次資料を巡って

記録が生まれるまで 季村範江	298
資料ガイド	299
「灘ボラ資料作業ノート」より	301
刻まれた聲 藤原直子	304
灘ボランティア資料の声と音と 市村登和	305
動詞の実践——アーカイブ試論 佐々木和子	306
灘ボランティア資料目録	307
活動日誌(2007年6月～2008年2月)	312
編集後記 佐々木和子	312
あとがき 季村範江	313

被災地の記憶と記録を考える

震災・まちのアーカイブ 設立にあたって

震災発生から 4 度目の春をむかえます。このたび、私たちは、震災の記憶と記録を考えるグループ「震災・まちのアーカイブ」を設立しました。

阪神大震災は、安政江戸大地震、関東大震災と並ぶ大きな出来事です。「歴史地震」として、後世さまざまな角度から顧みられることだと思います。しかし、そのための未来の歴史資料、わずかに残された現在の震災一次資料は日々散逸の危機にさらされています。私たちは、資料を残すことを通じて、震災の記録を後世に伝える活動に取り組みたいと思います。

なぜ記録なのか。なぜ直接的な救援活動ではなく、記録を残すことなのか。

被災地では今なお震災の様々な問題が山積しています。それら問題群に個別に取り組むべきではないのかという思いにとらわれます。しかし、私たちはあえて一步距離をとり、記録の保存を現場にしたいと思います。記録を残すことは、私たち自身がこれまでを検証し、よりよい未来を自分の手で作るために欠くことのできない作業です。今、震災一次資料の保存に取り組み震災の記録を残すことは、遠回りしているけれども、震災の引き起こした問題を根もとの部分で考える確実な方法のひとつだと信じます。

旗揚げにあたって「アーカイブ」といういささか聞きなれない言葉をかかげました。私たちは、この言葉を掲げることこそ、震災の問題を考えるもうひとつの鍵ではないかと考えています。アーカイブ（英語では Archives アーカイヴズ、ドイツ語では Archiv アルヒーフ、フランス語では Archives アルシーヴ）とは、もともとは、史料そのもの、ないしは史料群をさす言葉ですが、同時に史料を集める機関（史料館・文書館など）を意味する言葉でもあります。ヨーロッパやアメリカでは、国立や州立、市立のアーカイブが歴史的に定着し、古文書や行政文書が保存されることで、歴史研究や情報公開など市民社会の形成に大きく寄与してきました。しかし、被災地の足元を見ると、アーカイブは存在するのでしょうか。被災した一人ひとりが、自らの記憶をたどりながら、様々な記録を検証することのできる場所。震災の問題を考えるためには、そのような場が必要であるという思いから「アーカイブ」という言葉を選びました。

そして、アーカイブが「まち」にあるということ。行政や学者・研究者だけが利用するのではなく、まさに震災を体験した私たち自身が、あるいはいつか現れる未来の誰かが、自らの記録を、このまちの中で残してゆく。アーカイブがまちの中にあることこそが、私たちが歴史を語り継ぐ鍵ではないかと思っています。私たちのささやかな集まりが、その一つのきっかけになれば、と考えています。

具体的な活動としては、当面次のようなことを考えています。

(1) 震災一次資料に関する調査・保存・整理を行います。私たち「震災・まちのアーカイブ」は、「震災・活動記録室」の収集した震災ボランティアの一次資料を引き継ぎます。引き継いだ資料を整理し保存する。また、被災地における震災一次資料の保存状況を調査する。そのなかから、まだ十分確立されていない震災一次資料の保存・整理の方法について考えてゆきたいと思います。

(2)被災地でまちのアーカイブづくりのお手伝いをします。膨大に生み出された震災一次資料を何らかの機関で全て収集することは不可能です。そうではなくて、資料を生み出した人・機関が自らその資料を保存してゆく。震災一次資料保存の最も確実な方法とは資料を生み出した人自身がアーカイブを作ることです。既に、いくつかの元避難所や仮設住宅、ボランティア団体ではアーカイブが芽生えています。その芽を地域の人と一緒に育てながら、被災したまちにアーカイブ活動を根づかせたいと思います。

(3)被災地の記憶と記録を考える作業を行います。震災後、さまざまな形で記憶が問題になりました。亡くなった人の記憶、過去に神戸を襲った災厄の記憶、まちの記憶、そして震災の記憶。これらの記憶と記録はどのような関係なのでしょう。記録を残すことは、私たちの記憶とどのように結びついているのでしょうか。被災地の記憶と記録の問題について考えてゆきたいと思います。

(4)以上のような活動をもとに震災の記録を保存することの意味を考える通信「瓦版なまず」を発行します。被災地で震災記録保存はどのように取り組まれているのか、その課題はなにか。これらを見渡すことのできるメディアは、今のところ存在しません。震災記録保存に取り組む様々な団体と協力しながら、情報を共有できる場を作りたいと考えています。

それにしても、と思います。「被災地の記憶と記録を考える」とはなんと難しい課題か、と。出来事は誰かが記憶し、何度も思い起こしながら表現されなくては、沈黙に閉ざされてしまいます。記憶することとは、深い沈黙に思いを寄せる精神のあり方。私たちが、記憶や記録を考える時、同時に沈黙に向き合っていることを忘れてはならないと思います。沈黙の深さと重さを心に刻み、そこから記録の問題を考えること。その作業を、一つの限定された地域の問題としてではなく、様々な地域や歴史の広がり念頭に置いて行うこと。私たち自身の姿勢が問われているように感じています。

震災から3年、いささか出遅れたささやかなスタートですが、志は高く、そして一歩づつ地道に歩くことから始めたいと思います。

被災地の記憶と記録を考える 震災・まちのアーカイブ

The people's earthquake archives

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 神港金属㈱内

Tel 078-681-6231 078-681-6232



お知らせとお願ひ

- 上記の趣旨に賛同される方、是非会員として私たちの活動に加わってください。
- 今のところ、週1回活動しています（第2・第4土曜日と、第1・第3週の平日）。
- 資金ゼロ、市民の手弁当の活動です。賛助会員になっていただけるとありがたく存じます。個人1口1千円、法人1口1万円をお願いします。振込先：さくら銀行長田支店(普)6917717
- お問い合わせは、季村範江 078-781-8891 「震災・まちのアーカイブ 代表・季村範江」
寺田匡宏 0797-22-5288 までお願いします。



上 震源地の淡路島へ渡り、「野島断層記念館」と「北淡町歴史民俗資料館」で現地調査をする。
 左から藤原直子、木内寛子、佐々木和子、季村範江、季村敏夫、寺田匡宏。1998年8月29日。
 下 篠山市で合宿。「灘ボランティア」の代表だった中村由紀子さんを訪問。翌日、細見和之氏
 宅へ。前列左から市村登和、中村由紀子、佐々木和子、季村範江、西栄一、菅祥明。後列
 左から藤原秀次、清水信平、藤原直子、季村敏夫。2006年4月1日。